

垣間見えてきた小笠原のハシナギルカの社会構造

数十頭から時には百頭を超える群をつくって生活しているハシナギルカ。彼らの生息個体数や社会構造を探るため、OWAでは、帝京科学大学と共同してハシナギルカの個体識別調査を行っています。体表についた傷跡や各ヒレの形・欠損等、吻から尾ビレまで全身の特徴を使って識別されるミナミハンドウイルカとは異なり、背ビレの特徴のみを使った個体識別です（イルカ通信No.101参照）（図1）。現在、2013～2021年に収集されたデータを使って約260頭が識別できており、それと同時に、彼らの社会構造が少しずつ明らかになってきました。

図2は、2020年秋から約一年間の調査において比較的良好に観察された36個体の親密度を可視化したものです。36個体の内訳は、父島列島のみで観察された個体（図2では赤色の点）が16個体、母島列島でも観察された個体（同じく青色の点）が20個体です。この図では、36個体のうち、よく結びついている個体同士が近くに、あまり結びつきのない個体が周辺に配置される仕組みになっています。図を見ると、赤色同士や青色同士がよくまとまっており、中には青色と赤色で結ばれているものもいることがわかります。つまり、同じ列島内で観察された個体同士は一緒にいる傾向が強く、かつ父島—母島間でも個体の交流があることが示されました。この結果から、小笠原群島に生息するハシナギルカは、列島を跨いで離合集散（※）的な社会構造を持っている可能性が伺えます。ハシナギルカは賀島列島でも見られることから、今後、賀島列島にも調査の幅を広げることができれば、彼らの社会構造をより詳しく把握することができると考えています。



図1. 欠損が見られるハシナギルカの背ビレの一例

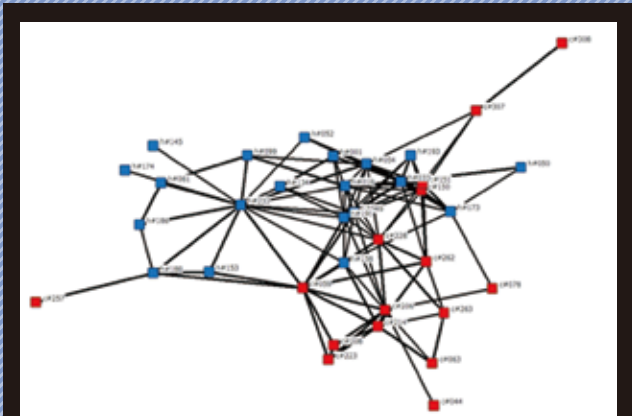
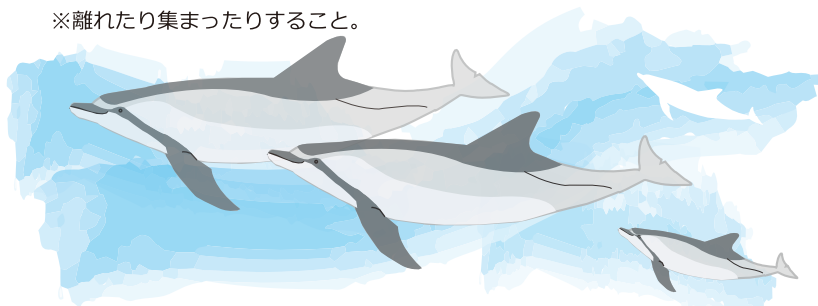


図2. 個体同士の結びつき

父島列島のみで観察された個体を赤色の点で、父島列島と母島列島の両方で観察された個体を青色の点で示す。よく結びついている個体同士が近くに、あまり結びつきのない個体が周辺に配置されている。

※離れたり集まったりすること。



..... 鯨類（イルカ・クジラ）に対するドローンの飛行ガイドラインの制定について

小型無人航空機（ドローン）による接近および飛行音が、野生動物に対して影響を与える可能性が懸念されています。動物にストレスを与えず、その自然な行動を妨げないようにするとともに、鯨類の生息環境を守ることを目的として、小笠原における鯨類に対するドローン飛行に関するガイドラインを制定しました。洋上でのドローン利用の際には、本ガイドラインに則った飛行を行っていただけますよう、ご理解とご協力をお願いします。

ドローンにより鯨類に接近する場合は、その接近角度に拘わらず、対象鯨より30m以内に接近してはならないこととし、以下のルールに則る。

- 他船がウォッチングしている群れおよびウォッチング中の他船の上空を飛行させない。
- 対象鯨の進行方向からは接近しない。
- ドローンの接近により対象鯨およびその周辺の野生動物の行動に変化が見られた場合は、飛行を中止する。



詳細はこちらから

